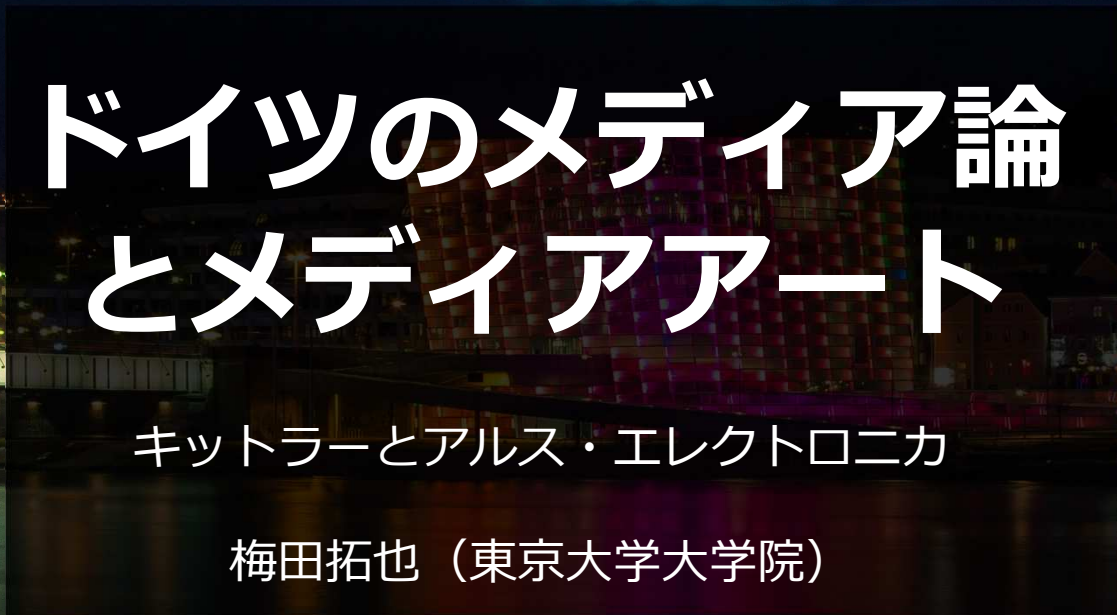




ドイツのメディア論 とメディアアート

キットラーとアルス・エレクトロニカ

梅田拓也（東京大学大学院）

梅田拓也 (東京大学大学院)

2020/5/16 山岡記念財団 若者文化シンポジウム



1. はじめに

■ 自己紹介

梅田 拓也 (Umeda Takuya)

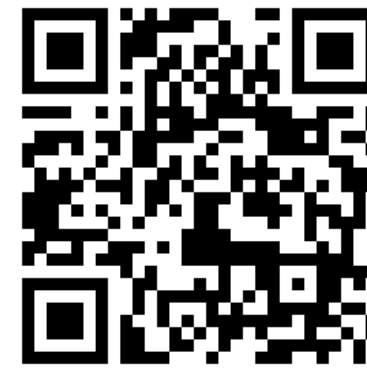
- ・ 1992年生まれ。東京大学大学院 学際情報学府博士2年
- ・ 最近の成果物：

「社会理論とメディア研究——ニクラス・ルーマンのマスメディア理論の再解釈」
(2018年、『マス・コミュニケーション研究』)

「文学研究とメディア論——マクルーハンとキットラー」
(2019年、『リーディング』)



Researchmap

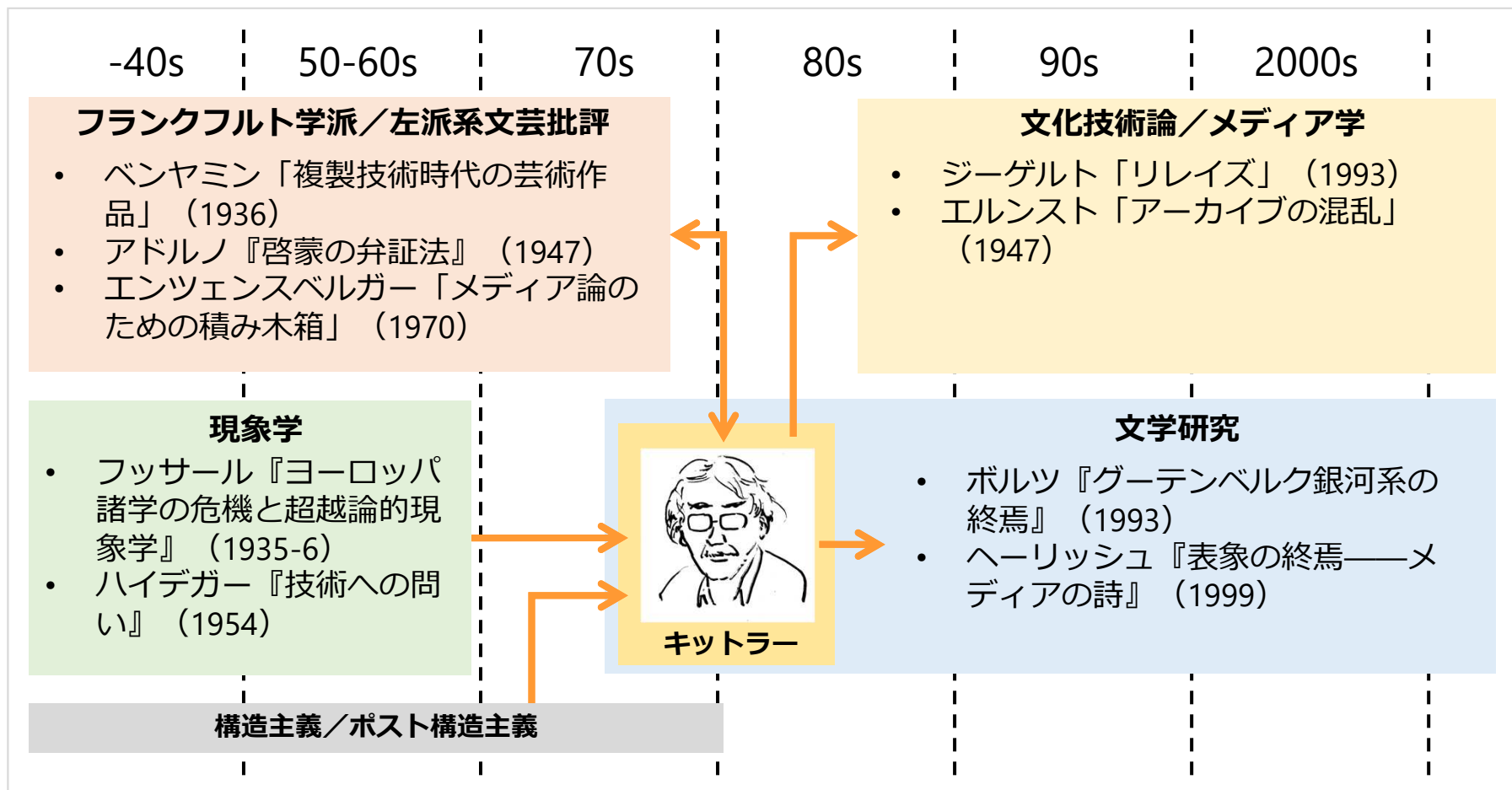


モノ-メディア研究会 HP

1. はじめに

1.1. 背景①：ドイツのメディア論

- ・ 80-90年代から、文学・文化研究の領域を中心にメディア論が発展
- ・ その中の特異点的存在がフリードリヒ・キットラー



1. はじめに

1.1. 背景②：ドイツ語圏のメディアアート

- ・メディアアート：ビデオやコンピューターなどの出現に触発され、それらの技術の利用を志向する現代芸術の総称。
- ・20世紀末のドイツ語圏はメディアアートの中心に。



アルス・エレクトロニカ・センター photo by Mikegr~commonswiki (Michael Greifeneder) CC 表示-継承 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=18897>

1. はじめに

1.2. 目的

メディア論



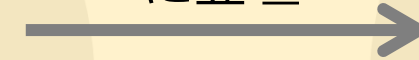
フリードリヒ・
キットラー

メディアアート



アルス・
エレクトロニカ

シンポジウム
に登壇



影響関係？

目的

キットラーとアルス・エレクトロニカの関係から、ドイツのメディア論とドイツ語圏でのメディアアートの展開の関係を考察すること

2. キットラーのメディア論

目的

キットラーとアルス・エレクトロニカの関係から、ドイツのメディア論とドイツ語圏でのメディアアートの展開の関係を考察すること

キットラーのメディア論

どんなことをやった人なのか？

アルス・エレクトロニカ

どのような取り組みなのか？なぜリンツ？

キットラーとアルス・エレクトロニカ

両者の間にはどのような関係があったのだろうか？

結論

ドイツのメディア論とメディアアートにはどのような関係があったのか？

2. キットラーのメディア論

2.1. フリードリヒ・キットラーとは？

フリードリヒ・キットラー (1943-2011)

- ・文学研究からメディア研究へ転向
→文学や芸術の前提としての「技術」



初期: 文学研究 1970s-80s前半	中期: メディア論 1980s後半-90s	後期: ギリシャ文化論 2000s-
『精神科学からの精神の追放』 『書き込みシステム1800/1900』	『グラモフォン・フィルム・タイプライター』 『ドラキュラの遺言』	『音楽と数学』

⇒文学・芸術批評において「技術」を論じる必要性を明確にした

2. キットラーのメディア論

2.2. キットラーのメディア実践

キットラーは自らメディアを作る実践者

① アナログシンセサイザーの制作

- ・ 1980年前後
 - ・ モジュラーシンセサイザーと呼ばれる、アナログシンセサイザーの一種
 - ・ ドイツ文学資料館で保存
- ⇒「ショート」や「フィードバック」と言った機械のメタファーを使った記述

② プログラミング

- ・ 1989年以降
 - ・ 画像処理に関連するものが中心
 - ・ 『DOS EXTRA』という雑誌を参考に進めていた。
 - ・ ドイツ文学資料館で保存
- ⇒ハードウェア／ソフトウェアの知識を前提した批評の可能性

⇒技術の成り立ち・仕組みを踏まえた新しい批評の可能性を示した

3. アルス・エレクトロニカ

目的

キットラーとアルス・エレクトロニカの関係から、ドイツのメディア論とドイツ語圏でのメディアアートの展開の関係を考察すること

キットラーのメディア論

文学・芸術の批評において、
技術の仕組み・成り立ちに
注目する

アルス・エレクトロニカ

どのような取り組みなの
か？なぜリンツ？

キットラーとアルス・エレクトロニカ

両者の間にはどのような関係があったのだろうか？

結論

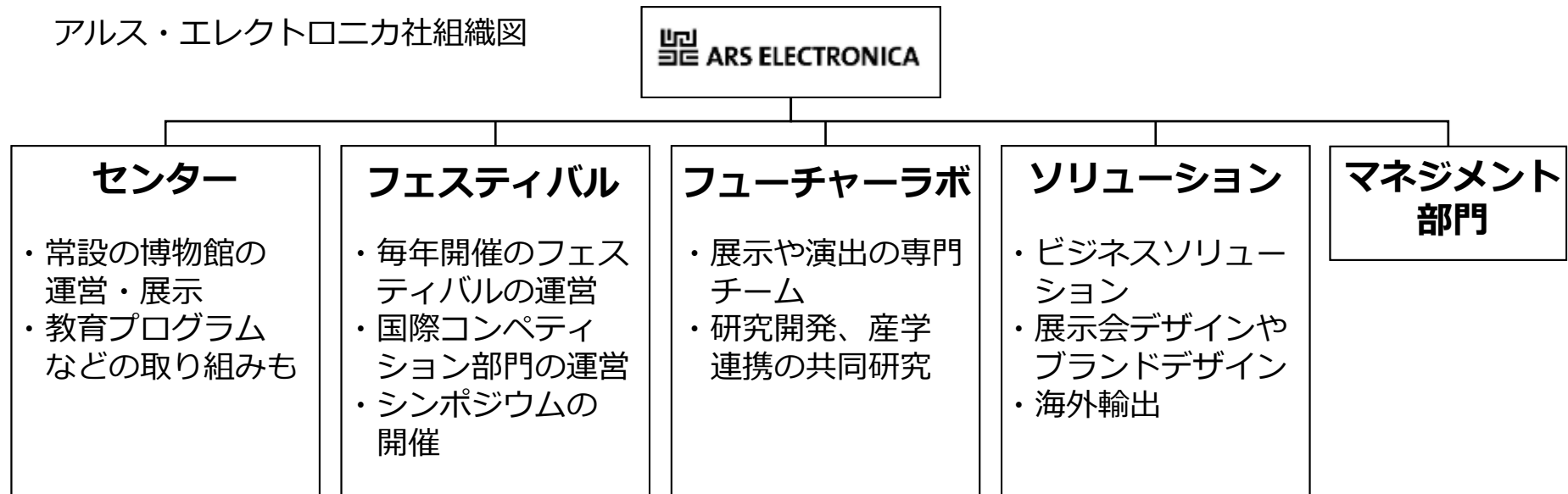
ドイツのメディア論とメディアアートにはどのような関係があったのか？

3. アルス・エレクトロニカ

3.1. アルス・エレクトロニカとは？

- ・世界最大のメディアアート祭 + 博物館 + 研究開発のための組織

アルス・エレクトロニカ社組織図

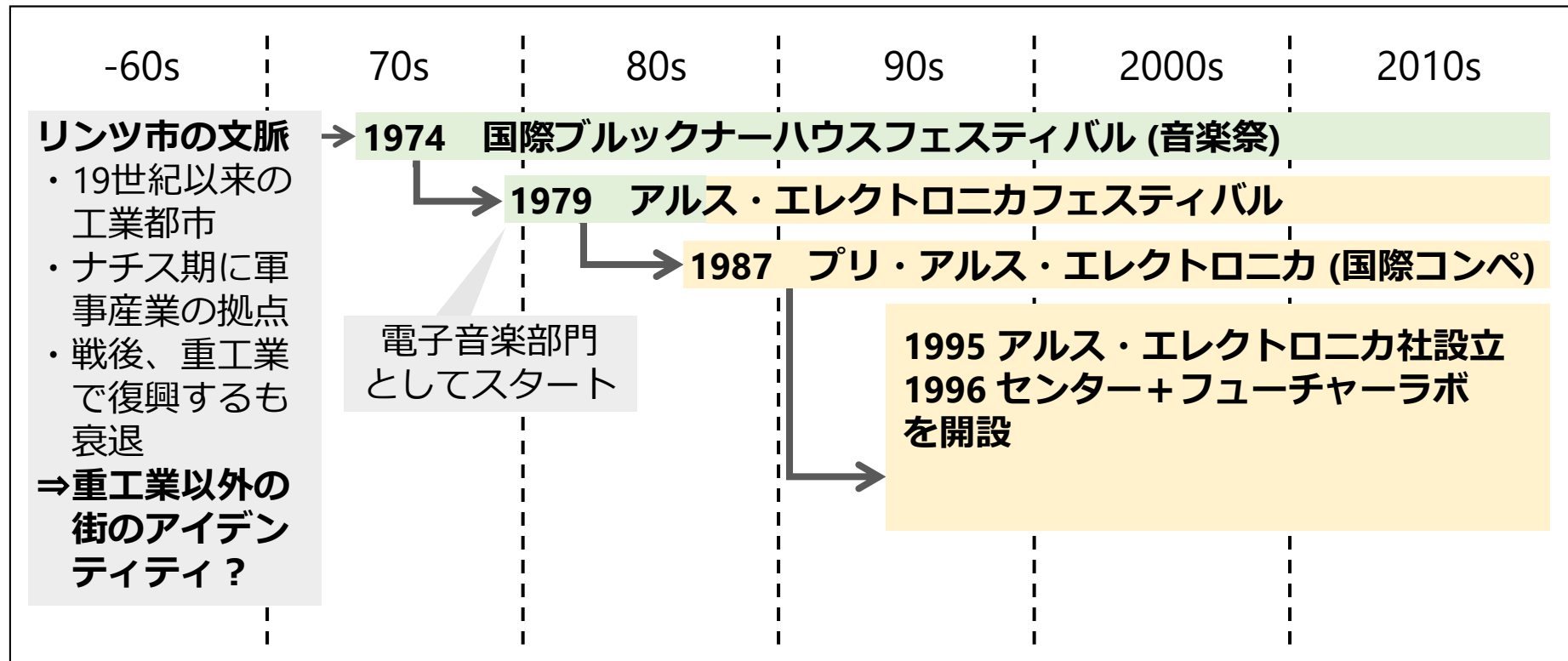


https://ars.electronic
.art/about/files/2018/
04/Ars_Electronica_Or
ganigramm_2018041
5.pdfより作成

⇒オーストリアを超えた、世界的なメディアアートを中心拠点

3. アルス・エレクトロニカ

3.2. アルス・エレクトロニカの誕生経緯



⇒リンツという都市の歴史的・地理的文脈から生起した

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

目的

キットラーとアルス・エレクトロニカの関係から、ドイツのメディア論とドイツ語圏でのメディアアートの展開の関係を考察すること

キットラーのメディア論

文学・芸術の批評において、
技術の仕組み・成り立ちに
注目する

アルス・エレクトロニカ

リンツ市の地域的文脈から
生まれた、メディアアートの
世界的拠点

キットラーとアルス・エレクトロニカ

両者の間にはどのような関係があったのだろうか？

結論

ドイツのメディア論とメディアアートにはどのような関係があったのか？

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.1. アルスエレクトロニカでのキットラーの講演

- ・ フェスティバル期間中の企画である学術シンポジウムに登壇
- ・ ボードリヤール、フルッサー、ジジェク、ヴィリリオなどの著名な現代思想家と共に議論

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

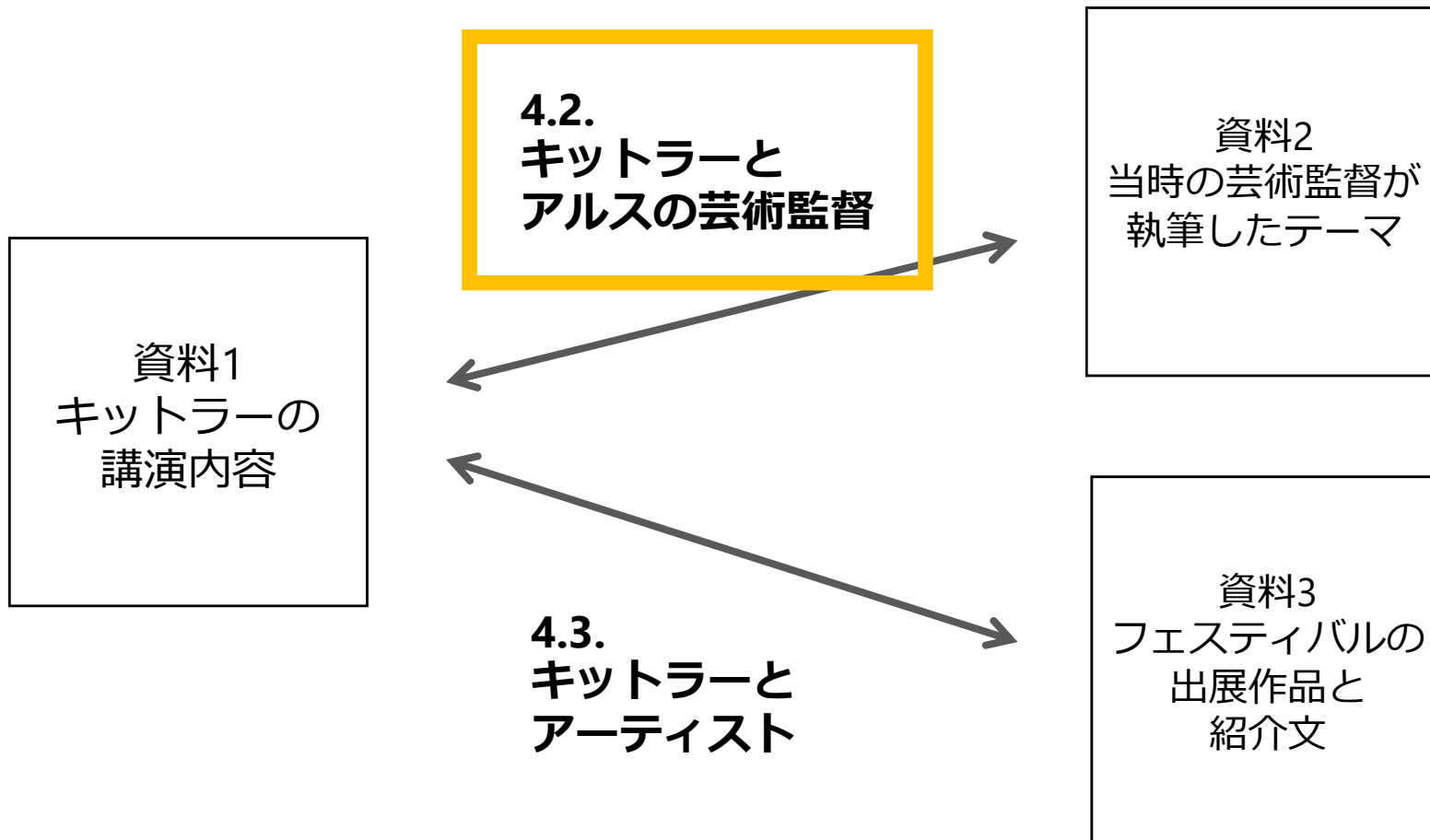
4.1. アルスエレクトロニカでのキットラーの講演

- ・キットラーは1988年から2009年まで計5回シンポジウムに登壇
- ・誰が人選したかは不明。芸術監督か司会者？（キットラーの発言より）

	1988	1995	1998	2003	2009
芸術監督	Peter Weibel		Gerfried Stocker		
司会者	Peter Gente／ Adelheid Paris (Merve出版)	Helga Novotny (ウィーン大)	Manuel DeLanda (コロンビア大)	Gerfried Stocker (AEC)	Derrick de Kerckhove (トロント大)
登壇者	Jean Baudrillard Hannes Böhringer Heinz von Foerster Vilém Flusser Friedrich Kittler Peter Weibel	Friedrich Kittler Les Levidov Pierre Lévy Frank Ogden Lucien Sfez McKenzie Wark Slavoi Zizek	Peter Arnett Ute Bernhardt Tim Druckrey J. Doayne Farmer Joichi Ito Friedrich Kittler Birgit Richard Georg Schöfbänker Gerfried Stocker Paul Virilio 他10名	Gerfried Stocker Friedrich Kittler Cindy Cohn Erkki Huhtamo Peter J. Bentley	Friedrich Kittler Hiroshi Ishiguro

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督



→ コンピューター技術やそれを用いたアートについてどのように述べているのか比較

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督

- ・芸術監督の書いたテーマとキットラーの講演内容に共通点
- ・キットラーがあわせた？／芸術監督との関係？ ⇒問題意識の共有

	1988	1995	1998	2003	2009
芸術監督	ペーター・ヴァイベル 		ゲアフリート・シュトッカー 		
アルスのテーマ	シーンの芸術	神話の情報	情報戦争	コード	人間の自然
キットラーの講演	フィクションとシミュレーション	情報の神話	情報戦争：理論史について	コード：あるいはいかに別様に書かれるのか	ヨーロッパにおける自動人形の歴史

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督

①メディアアートを論じるための理論的基盤の探究

- ・ 伝統芸術とメディアアートの差異を強調
- ・ メディアアートを論じるための新しい理論的基盤の構築の必要性を強調



この10年間で、メディアアートが発展し、急速なスピードで普及した。この時代に沿ったメディアアート理論を生み出すことを目的に、これらの根本的な議論を再び取り上げ、拡大することを緊急の課題としている。（シュトッカー 2003年の趣旨文）



芸術のオペレーションは（ラカンの用語でいうと）象徴界に属するものであるが、心理学的なレベルでは想像的な効果をもたらす。これに対し技術メディアは、現実界とその予測不可能性の次元において、象徴的な手順で作動する。（キットラー 1988年の講演）

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督

②メディアの持つ負の側面の問題化

- ・「虚構」「神話」「戦争」など、メディアが文化や社会にもたらす負の側面を強調
- ・戦争：キットラーのメディア論において重要な主題



市民生活の様々な局面の中で、「戦争は全てのものの父である」ということわざがぴたりと当てはまる領域は、軍事目的で生まれたコンピューターとインターネットを中心とする、デジタルな情報技術分野において他にない。（シュトッカー 1998年の趣旨文）



コンピューターのアルゴリズムは絵画や美学的な目的のために作られたのではなく敵の戦略による脅威を最小化するために作られた。
（キットラー 1988年の講演）

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督

③科学的知識・科学史に注目する重要性

- ・メディアアートを考える上で、メディアの前提となる科学的知識や科学史を重視する必要性



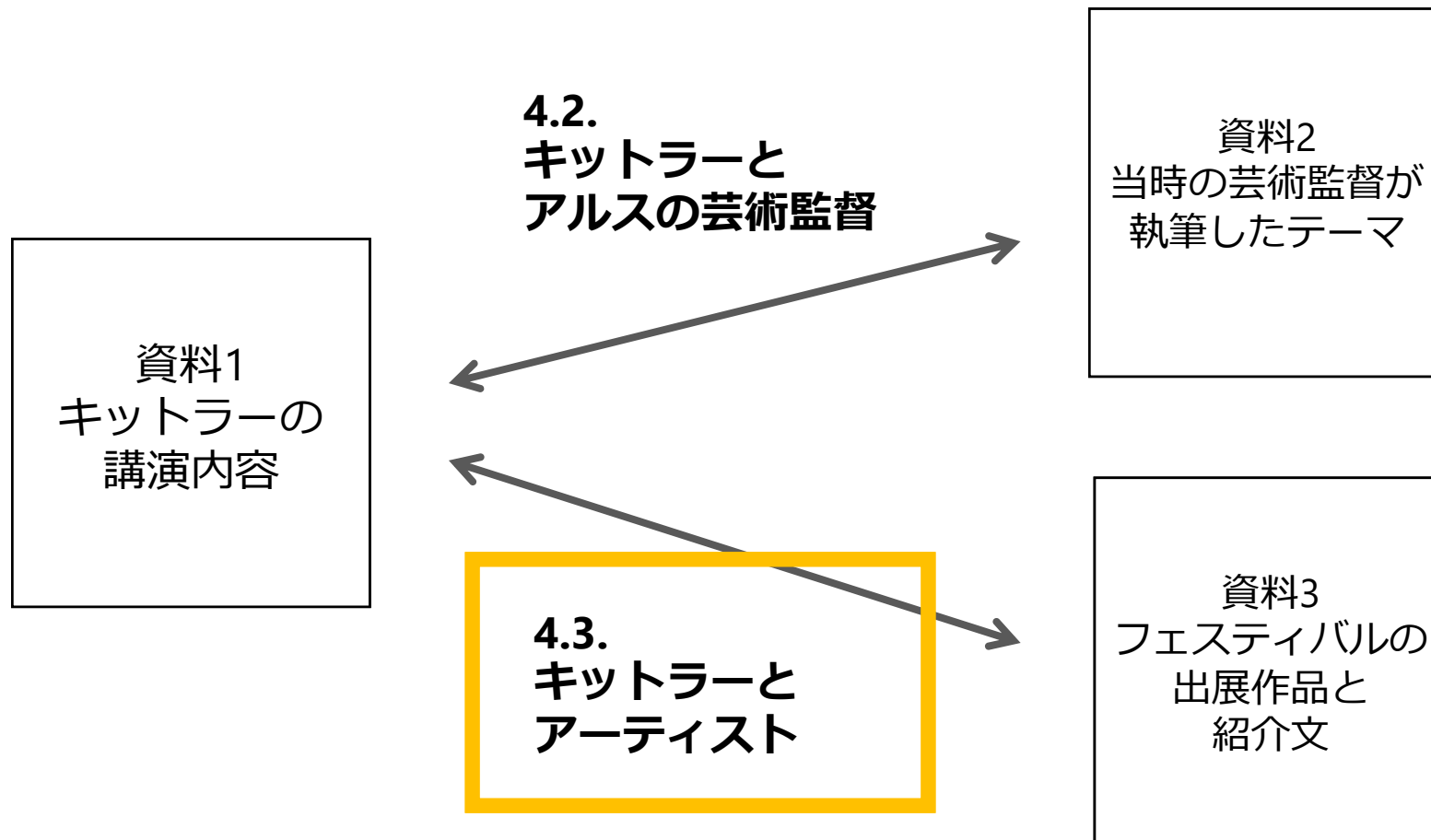
アルスエレクトロニカのモットーは、アート・技術・社会の関係を考えることであるが、アートの歴史を考える上で、技術や社会的な側面を無視することはできない。（ヴァイベル 1988年の趣旨文）



プログラミングコードの文化・芸術に対する機能を考察するため「コード」という概念の意味を巡って暗号史や数学史を辿る
(キットラー 2003年の講演)

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.2. キットラーとアルスの芸術監督



→キットラーのメディアに対する考察から、出展作品の主題を読み解いてみる

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.3. キットラーとアーティスト

①技術が人間に触知し得ない領域を産み出していること



ハードウェアやソフトウェアについての深淵、つまり隠された情報がなければ、デジタルデータやコミュニケーションは存在しえない。
(キットラー・1995年の講演)

⇒技術によって可能になる触知しえなくなった領域を告発する作品

Peter Weibel 《Code As Time》 (1988)

- ・画面上にグリッド線を表示し、それを何層にも重ね回転させる。
- ・グリッド線はコンピューターによって産み出されるタイムコードを表し、グリッド線の重なりは、タイムコードが見えないところで私たちの社会を支配するあり方を表す。

<http://archive.aec.at/prix/showmode/21075/>

Liang-Yuan Wang 《THE SITTER》 (1998)

- ・機械で出来た装置が、不気味な機械の映像を見せて、機械の赤ちゃんをあやすという奇想的な風景を描く、CGアニメーション作品
- ・機械同士の繋がりと、そこから人間が排除。人間に触知しえない領域の告発。

<http://archive.aec.at/prix/showmode/32160/>

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.3. キットラーとアーティスト

②技術が新しい権力の形態を生み出していること



現代の情報戦は誰でも机の上で起こせる。国民国家の権力は解体された。だがその権力を新たな産業が集約している。

(キットラー・1998年の講演)

⇒この権力を鑑賞者に発見させるインタラクティブな作品

エキソニモ 《Discoder》 (1999)

- ・誰でも簡単に、不特定多数の人々と、htmlを破壊して遊ぶことの出来るアプリケーション。

<http://archive.aec.at/prix/showmode/35554/>

LarbitsSisters 《BitSoil Popup Tax & Hack Campaign》 (2018)

- ・トラッキング技術などで、ネットユーザーの「情報」を商品化している巨大IT企業に対し、SNSのユーザーのクリックごとに仮想の税金を課すというパフォーマンス。

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.3. キットラーとアーティスト

②技術が新しい権力の形態を生み出していること



現代の情報戦は誰でも机の上で起こせる。国民国家の権力は解体された。だがその権力を新たな産業が集約している。

(キットラー・1998年の講演)

⇒この権力への抵抗手段から、「物質性」を可視化する作品

Christoph Ebener, Uli Winters 《Byte》 (1998)

- ・ネズミに、電子機器のケーブルを見たら噛みきるように教え込むというパフォーマンス。これをGoogleなどのサーバーセンターに放てば……？

Willy Sengewald 《Jammer Horn》 (2009)

- ・吹くと半径30～50mで、携帯の電波を妨害する電波を発生させる角笛。
- ・太古からテレコミュニケーションの手段として用いられていた角笛を用い、テレコミュニケーションを阻害。

4. キットラーとアルス・エレクトロニカ

4.3. キットラーとアーティスト

③あらゆるデータがコンピューターに操作されること



第2次世界大戦中に発展したシミュレーションという軍事的概念は美学的なシミュレーションをも再構成する。

(キットラー・1988年の講演)

⇒操作可能になった帰結を体現する作品

Michael Saup 《Binary Ballistic Ballet》 (1995)

- ・ヴァイオリニスト、コンピューター、ダンサーの協働によって演じられるバレエ作品。
- ・作者としてのコンピューター／コンピューターへの入出力としての伝統芸術

やくしまるえつこ 《わたしは人類》 (2016)

- ・微生物から取り出した遺伝子情報から楽曲を作曲。曲のデータを再度遺伝子情報に変換し微生物に植え付け。
- ・音楽と非音楽の境界を越境。
- ・記録媒体としての「生物」。

5. おわりに

5.1. 結論

目的

キットラーとアルス・エレクトロニカの関係から、ドイツのメディア論とドイツ語圏でのメディアアートの展開の関係を考察すること

キットラーのメディア論

文学・芸術の批評において、
技術の仕組み・成り立ちに
注目する

アルス・エレクトロニカ

リンツ市の地域的文脈から
生まれた、メディアアート
の世界的拠点

キットラーとアルス・エレクトロニカ

- ①キットラーと運営側：問題意識の立て方について影響関係
- ②キットラーとアーティスト：問題意識を共有。また作品の中で問題意識が深化

結論

メディア論者、フェスティバル、アーティストは、
問題意識を共有し、影響を与えあいながらそれぞれの活動を進めていた

5. おわりに

5.2. 展望：デジタル人文学の重要性

- ・メディアを用いた様々な文化実践（日常生活、芸術、学問etc）について論じる際、そのメディアについての詳細な知識が必要
- ・現代の思想家のテクストはデジタルデータで保存されており、没後にどれがオリジナルかを判別するのは困難

⇒**文理の壁を越え、デジタル人文学の方法論を示すことが喫緊の課題**



キットラーの原稿、デジタルデータの保存されたドイツ文学資料館（筆者撮影）